

夕霧の紫の上への思慕―野分の役割とは何か―

三 石 純 子

一 はじめに

『源氏物語』は紫式部による平安中期の作品であり、五十四帖から成り立っている。そのなかに「野分」という巻がある。野分とは台風のことを指している。「野分」巻は『源氏物語』の中でも珍しく、大部分が夕霧の視点で物語が進んでいく。夕霧が六条院に住まう女性達を垣間見し、父である光源氏の男性としての一面をも垣間見る巻である。そして、女性達を花に例え、比較する、美女比べの意味合いを含んだ巻でもある。その中には、夕霧が紫の上を憧れの存在として、「御法」巻で彼女が死ぬまで思い続ける契機となった垣間見や、光源氏が世間的には自らの子として養っている内大臣の娘である玉鬘に、まるで恋愛関係であるかのように戯れる姿を垣間見してしまう夕霧が描かれており、父子ともに近親相姦的な要素がある。ここでは、野分という現象と夕霧という人物から「野分」の巻について考える。

二 「野分」概要

秋の草花が美しく咲き、秋好中宮が六条院に里下がりしている中、例年よりも激しい野分が六条院を襲った。風の見舞いのために訪れた六条院で、夕霧は源氏が隠し続けてきた紫の上を垣間見て、彼女の美しさを

樺桜に例える。その夜、夕霧は、祖母大宮の住まう三条宮で昼間に見た紫の上を想いながら過ごす。翌朝、夕霧は母代りだった花散里を見舞った後、源氏の寝所へ赴き、源氏と紫の上の睦まじい様子を耳にする。源氏は夕霧に大宮の様子を尋ねた後、秋好中宮への見舞いの使者として夕霧を使わした。源氏は中宮からの返事を伝えにきた夕霧とともに中宮を見舞うために支度をしていたが、夕霧のうわの空な態度から紫の上を見られたことに気付く。そのまま夕霧を供として、六条院の女性達を順番に見舞っていく。中宮を見舞った後、明石の君を訪問するが早々に立ち去ってしまう。次に玉鬘のもとを訪れる。そこで夕霧は実の娘（とされている）である玉鬘に戯れかかる源氏の姿を見てしまい驚き厭わしく思うが、垣間見た玉鬘は八重山吹に例えるほど美しかった。次に花散里のもとへ向かうと冬物の着物を仕立てていた。源氏の見舞いに付き添い、父としての源氏の一面だけでなく、男性としての一面をも覗き見てしまった夕霧は雲居の雁への恋しさが募り、明石の姫君のもとを訪れ、雲居の雁への恋文をしたためる。夕霧はそこで垣間見た明石の姫君の美しさを藤の花に例え、自分も源氏のように、花のような美しさを持つ女性達と思いのままに過ぎてみたいと「まめ人」らしからぬことを考える。その後、夕霧が大宮のもとを訪れると、大宮の息子であり、雲居の雁の父である内大臣が来ていて、雲居の雁について話していた。

三 野分が表すもの

原田敦子氏は『源氏物語』の野分について「『源氏物語』野分巻は、夕方から吹き荒れ始め、翌朝になってようやくおさまった野分を、時間の経過を追って人物の動きとともに描き切」っており、「野分は夕霧の心象風景となって、物語の中を吹きぬけたのであった。」(注2)と指摘している。ここでは、本文中の野分に関する表現が見られる箇所を取り上げて、野分がどのような役割を果たしたのか考えていきたいと思う。

大臣は、姫君の御方におはしますほどに、中将の君参りたまひて、東の渡殿の小障子の上より、妻戸の開きたる隙を何心もなく見入れたまへるに、女房のあまた見ゆれば、立ちとまりて音もせで見ぬ。御屏風も、風のいたく吹きければ、押したたみ寄せたるに、見通しあらはなる廂の御座にあたまへる人、ものに紛るべくもあらず、気高くきよらに、さとにほふ心地して、春の曙の霞の間より、おもしろき榊桜の咲き乱れたるを見る心地す。あぢきなく、見たてまつるわが顔にも移り来るやうに、愛敬はにほひ散りて、またなくめづらしき人の御さまなり。御簾の吹き上げらるるを、人々押へて、いかにしたるにかあらむ、うち笑ひたまへる、いとみじく見ゆ。花どもを心苦しがりて、え見棄てて入りたまはず。御前なる人々も、さまざまにもきよげなる姿どもは見わたさるれど、目移るべくもあらず。大臣のいとけ遠くはるかにもてなしたまへるは、かく、見る人ただにはえ思ふまじき御ありさまを、至り深き御心にて、もしかかることもやと思すなりけりと思ふに、けはひ恐ろしうて、立ち去るにぞ、(注3 二六四頁～二六六頁)

これは、まだ風が強く吹き付ける中、夕霧が六条院へとやってきて、今まで源氏が隠し続けてきた最愛の妻紫の上を垣間見てしまう場面である。「女性の最高の美は、決定的瞬間におけるほとんど戦慄的な直観によって捉えられ、比喩的象徴的に表現される以外に方法がない。」(注3)とあるように、紫の上は一瞬にして夕霧の中で最高の女性となった。今まで見たこともない程に美しい女性を垣間見て、まるで嵐のように激しく唐突に心を奪われる。ここで、風が吹き荒れている外の様子と、夕霧の内面が繋がる。しかし、このときはまだ父である源氏が自分を紫の上に近づけなかつた理由に思いを巡らせる程には冷静さを保っており、その後の源氏の出現に気付き、会話もできている。つまり、紫の上への想いは源氏という大きな存在を前にして、一端鎮静させられたと考えられる。以降、夕霧の紫の上に対する想いを中心に考察していきたい。

中将、夜もすがら荒き風の音にも、すずろにもあはれなり。心にかけて恋しと思ふ人の御事はさしおかれて、ありつる御面影の忘れぬを、こはいかにおぼゆる心ぞ、あるまじき思ひもこそ添へ、いと恐ろしきこと、とみづから思ひ紛らはし、他事に思ひ移れど、なほふとおぼえつつ(注3 二六九頁)

人柄のいとまめやかなれば、似げなさを思ひよらねど、さやうならむ人をこそ、同じくは見て明かし暮らさめ、限りあらむ命のほども、いますこしはかならず延びなむかし、と思ひつづけらる。(注3 二六九頁)

これは、夕霧が風の見舞いで六条院を訪れた日の夜、祖母である大宮

のもとに泊っている夕霧が、紫の上の面影を忘れられず、雲居の雁のこ
とよりも紫の上のことを考えてしまう自分に戸惑う場面である。外では
未だに風が強く吹いており、夕霧の心の中でも紫の上を見た衝撃が冷め
ていない。そのため、夕霧は近親相姦を怖れ多いことだとしながらも、
紫の上に似た人を妻に迎えたいとまで考えている。夕霧がこのように大
胆な考えに到ったのは、この場には紫の上に対する想いへの歯止めとな
る源氏の姿が無いからではないだろうか。

暁方に風すこししめりて、むら雨のやうに降り出づ。(注3)

二七〇頁)

道のほど、横さま雨いと冷やかに吹き入る。空のけしきもすこきに、
あやしくあくがれたる心地して、何ごとぞや、またわが心に思ひ加
はれるよ、と思ひ出づれば、いと似げなきことなりけり、あなもの
狂ほし、とざまかうざまに思ひつつ、東の御方にまづ参てたまへれ
ば(注3 二七〇頁)

これは、翌朝、夕霧が風が少し弱くなってから六条院に向かう場面で
ある。夕霧は不思議と魂が身から離れるような気持ちになって、ここで
初めて自分が本格的に紫の上に魅かれていることを自覚する。ここで
は、風は弱くなったものの、雨が車の中に入り込んでくる描写が、夕霧
の内面と呼応している。つまり、紫の上を垣間見た衝撃が次第に恋慕へ
と変わり、雨のように心に沁み入ってきている。これは、恋慕を抑制す
る圧力となる源氏が側にいないからこそ起こりえた気持ちの自覚だと考
える。

南の殿には、御格子まわりわたして、昨夜見棄てがたかりし花ども
の、行く方も知らぬやうにてしをれ臥したるを見たまひけり。(注
3 二七四頁〜二七五頁)

御直衣など奉るとて、御簾ひき上げて入りたまふに、短き御几帳ひ
き寄せて、はつかに見ゆる御袖口は、さにこそはあらめと思ふに、
胸つぶつぶと鳴る心地するもうたてあれば、外さまに見やりつ。(注
3 二七五頁)

出たまふに、中将ながめ入りて、とみにもおどろくまじき気色にて
ゐたまへるを、心鋭き人の御目にはいかが見たまひけむ(注3
二七六頁)

これは、秋好中宮のもとを見舞った夕霧が、戻ってきて、源氏へ中宮
からの返事を伝えた後、源氏が中宮のもとを訪れるために衣装を着替え
ている場面である。寝所にちらりと見える紫の上の袖口を見た夕霧は、
紫の上への恋情をすでに自覚しているが、源氏が側にいるため抑制を働
かせ視線を逸らしている。しかし、源氏の姿が見えないと気がつかぬう
ちに物思いに耽ってしまった、源氏に紫の上を垣間見たことを知られてし
まう。抑制となるはずの源氏がいても抑制しきれないほどの想いとして、
紫の上への恋慕が夕霧に定着したことを示していると思われる。ここで
は、夕霧が紫の上を垣間見る要因となった花々が野分のために萎れて残
っている描写が、恋慕の定着を暗示していると考えられる。

日のはなやかにさし出でたるほど(注3 二七八頁)

かく戯れたまふけしきのしるきを、あやしのわざや、親子と聞こえながら、かく懐離れず、もの近かべきほどかはと目とまりぬ。見やつけたまはむと恐ろしけれど、あやしきに心もおどろきて(注3 二七九頁)

ことと馴れ馴れしきにこそあめれ、いであなうたて、いかなることにかあらむ、思ひよらぬ隈なくおはしける御心にて、もとより見馴れ生ほしたてたまはぬは、かかる御思ひ添ひたまへるなめり、むべなりけりや、あな疎ましと思ふ心も恥づかし。(注3 二七九頁)

女の御さま、げにはらからといふとも、すこし立ち退きて、異腹ぞかしなど思はむは、などか心あやまりもせざらむとおぼゆ。(注3 二七九頁～二八〇頁)

これは、夕霧が源氏に付き添って六条院の女性達を見舞う中、玉鬘を見舞う場面である。外の天気は回復しているようだが、夕霧の心は嵐の最中であるかのように乱される。夕霧は父と実の娘だと認識されている玉鬘との戯れに驚き、嫌悪を抱いている。その一方で、彼女の美しさに自分もまた心を乱されている。源氏の近親相姦的な行いを嫌悪する一方で、自身にも近親相姦を起す要因があると自覚している。しかし、外の天気と呼応していると考えられる夕霧の心情から、「心あやまりもせざらむ」という表現における玉鬘への想いは単なる可能性を示唆し、玉鬘の美しさを表現するためだけに使われたと考えられ、紫の上に抱く恋情以上のものではないと思われる。

むつかしき方々めぐりたまふ御供に歩いて、中将はなま心やましよう、書かまほしき文など、日たけぬるを思ひつつ、姫君の御方に参りたまへり。(注3 二八二頁)

かの見つるさきざき、桜、山吹といはば、これは藤の花とやいふべからむ、木高き木より咲きかかりて、風になびきたるにほひは、かくぞあるかし、と思ひよそへらる。かかる人々を、心にまかせて明け暮れ見たてまつらばや、さもありぬべきほどながら、隔て隔てのけざやかなることつられ、など思ふに、まめ心もなまあくがる心地す。(注3 二八五頁)

これは、源氏との風見舞いを終えた夕霧が、明石の姫君のところへやってきて、姫君を垣間見る場面である。ここには風や天気に関する記述は無いが、「風に怖ぢさせたまひて、今朝はえ起き上がりたまはざりつる」(注3 二八二頁)という様子だった姫君が、紫の上のもとに移動しているということからやはり風は弱まっており、夕霧の心も落ち着いていると考えられるが、夕霧はこの場面の冒頭で想いを寄せている雲居の雁に対する心遣いを見せていて、完全に心が静まっているわけではないと思われる。だからこそ、紫の上や玉鬘と比較するために明石の姫君を垣間見しようと思ったのであり、その結果、源氏が近づけさせない美しい人々に囲まれて過ごしたいという「まめ人」としていつもは抱かない感情を抱いている。最後の部分で三人の女性を比較する際、紫の上を思い起こして夕霧の心は少し乱れているのではないだろうか。

祖母宮の御もとにも参りたまへれば、のどやかにて御行ひしたまふ。
(注3 二八五頁)

内大臣も参りたまへるに、御殿油など参りて、のどやかに御物語など聞こえたまふ。(注3 二八五頁)

これは、夕霧が大宮のもとに参上するとそこには内大臣が来ていて、母である大宮に娘たちのことについて話している、「野分」の最後の場面である。ここでは、「風の音をも、今はかへりて、稚き子のやうに怖ぢたまふれば」といった様子だった大宮が「のどやかにて御行ひしたまふ」(注3)のだから、野分は治まっていると思われる。物語における野分の影響力がだんだんと少なくなつてくると同時に、視点が夕霧から語り手へと移行していく。

ここまで野分について見てきたが、野分は台風を表すため、雨や風の描写が野分だと定義すると、夕霧の心情を表現しているのは野分だけではないと私は考える。野分という現象だけではなく、花々が野分のために萎れて残っているといった野分がもたらした影響、そして雨や風だけではなく、日が出てきたなどの天候そのものが夕霧の心情、主に恋情と呼応しているのではないだろうか。野分が吹き荒れる中、紫の上を垣間見、その美しさに心を奪われ、次第にその気持ちが恋慕へと変わり、夕霧の心に定着していく様は「野分」の巻における時間の経過に良く似ていると思う。つまり、野分の荒々しさは紫の上への強烈な憧れを、野分の残した荒れ果てた庭の様子などは夕霧の心がかき乱された名残を表しているのではないかと考えている。野分は、夕霧の「まめ人」らしからぬ心の乱れを象徴しているのではないだろうか。

源氏物語において、似ている、という要素は、大変重要に、扱われているようである。特に、男性が女性に想いを寄せる場合、誰々に似ている、という感想から、想いが湧き立つことが非常に多い。そして、それはほとんどすべての場合、垣間見て持つ印象なのである。
(注4)

確かに夕霧は、「少女」の巻で垣間見た惟光の娘の五節の舞姫を垣間見たときも

ただかの人の御ほどと見えて、いますこしそびやかに、様体などのことさらび、をかしきところはまさりてさへ見ゆ。暗ければこまかには見えねど、ほどのいとよく思ひ出でらるるさまに、心移るとはなけれど、ただにもあらで(注3 六一頁)

というように、五節の舞姫に雲居の雁を重ねて見ている。そんな夕霧が、初めて紫の上を垣間見たときには、「ものに紛るべくもあらず」(注3 二六五頁)と評しているように、想い人である雲居の雁に似ている訳でもなく、ましてや畏敬の対象である父の最愛の妻である紫の上に囚らるも恋焦がれることとなつてしまった夕霧の、源氏の存在を怖れつつも想うことを止められない「まめ人」らしからぬ心の乱れが、野分という荒々しい現象で具現化されていると考えられる。そして、紫の上への想いと差別化するために、玉鬘や明石の姫君の場面では野分の荒々しさが描かれないのだと考えられる。

四 おわりに

「野分」の巻は夕霧の視点から進行することによって、夕霧から見た源氏の近親相姦の可能性を浮かび上がらせた。そしてそれが夕霧自身の近親相姦という可能性を生じさせており、物語の展開を暗示している。野分は夕霧の心を乱したのではなく、物語そのものを乱そうとしていると考えられる。今後は「野分」という巻の野分という現象だけではなく、「源氏物語」に「野分」の巻がどのような影響を及ぼしていくのかについてもっと詳しく考察を進めていきたい。

引用文献

- 注1 原田敦子「野分の美」『講座源氏物語の世界〈第五集〉』有斐閣 一九八一年八月三〇日
- 注2 阿部秋生・秋山虔・今井源衛・鈴木日出男『新編日本古典文学全集22 源氏物語③』小学館 一九九六年一月一〇日
- 注3 川上規子「源氏物語における垣間見の研究」『東京女子大学日本文学第四六号』東京女子大学学会日本文学部会 一九七六年九月三〇日

参考文献

- 外山映次・岩田晴美・清水孝純・中根悠美子「野分の巻」『解釈二・三』寧楽書房 一九五六年三月一日
- 紫藤誠也「源氏物語『野分』の巻考」『神戸女子大学紀要文学部篇二〇巻一号』神戸女子大学 一九八七年三月二〇日
- 三角洋一「野分以後―野分・行幸・藤袴」『國文學解釈と教材の研究』一九八七年一月二〇日
- 後藤祥子「夕霧」『人物造型からみた「源氏物語」』国文学解釈と鑑賞別冊』至文堂 一九九八年五月二〇日
- 齊藤奈美「風こそげに巖も吹き上げつべきものなりけれ―野分巻の垣間見と紫の上の居所―」『日本芸論叢第一五号』東北大学文学部国文学研究室 二〇〇一年三月三十一日

佐藤瞳「源氏物語」『野分』巻の〈野分〉をめぐって―夕霧の〈脚〉と物語の「時間」―『湘南文学第四一号』東海大学日本文学会 二〇〇七年三月三日

熊谷義隆「少女巻から藤裏葉巻の光源氏と夕霧―野分巻の垣間見、そして描かれざる親の意思―」『源氏物語の展望第一輯』三弥井書店 二〇〇七年三月二八日